

カンパニーデラシネラ×

リー・レンシン(マレーシア)、リウ・ジュイチュー(台湾)

『TOGE』第3回報告書〈成果発表〉

高橋彩子

『TOGE』第3回報告書〈成果発表〉

今回のデラシネラ公演は、KAAT神奈川芸術劇場の無料のアトリウムパフォーマンス『**TOGEアトリウム**』と、KAAT中スタジオでの『**TOGE**』劇場公演の2つを実施。約2週間のKAATアトリエ(稽古場)での稽古を経て、12月、以下のスケジュールで公演が行われた。

5日	13時～21時	アトリウムにて実物を使用して実寸稽古
6日	10時～18時	稽古
7日	10時～18時	稽古
8日	稽古ののち、	
	13時～18時	アトリエにて準備
	20時～	アトリウムパフォーマンスゲネ
9日	10時～15時30分	アトリエにて準備
	17時	『 TOGEアトリウム 』
10日	10時～15時30分	アトリエにて準備
	17時	『 TOGEアトリウム 』
11日	10時～15時30分	アトリエにて準備
	17時	『 TOGEアトリウム 』
14日	稽古オフ	仕込み開始
15日	13時～21時	舞台稽古
16日	13時～21時	舞台稽古
17日	ゲネ後	
	17時	『 TOGE 』劇場公演
18日	11時30分～12時	note(ダメ出し)
	13時&17時	『 TOGE 』劇場公演
19日	13時	『 TOGE 』劇場公演

1. 『TOGEアトリウム』公演

12月9日、アトリウムパフォーマンス初日。平日の夕方に行う30分の公演であるにもかかわらず、30人ほどの観客が集まった。劇場公演と同じく長いゴムを張ったスペース。違うのは、使用する台をビニールでくるみ、その下に巨大なビニール袋を仕込んでいる点だ。

開演すると、梶原暁子、リー・レンシン、崎山莉奈、リウ・ジュイチュー、藤田桃子の5人が登場。張りめぐらしたゴムの内側で動く5人。家畜の声や鳥のさえずりなどが聴こえる中、リングが持ち込まれ、一人がリングを取ろうとするのを他のメンバーがひとしきり邪魔する。やがて藤田が手に取ることに成功したリングは、他のメンバーの手に次々と渡り……。

固定されていたゴムが小野寺修二によって外され、女性たちは劇場公演でも使われる、ゴムを共同体の船のように扱う動きへ。やがて、台の下から巨大なビニール袋が広げられ、波のように動く袋の上を歩く者、その中に入る者、外で踊る者などに分かれていく。やがて、ジュイチューが踊る崎山を撮影し、リアルタイムでそれがモニターに映し出される。アクティング・エリアいっぱい膨らんだビニール袋の中に入る、ジュイチューと崎山。観客は袋に映る彼らのシルエットと、モニターに映る映像を見ることになる。袋の中ではライトも使われ、幻想的な雰囲気。

しかし、衝撃音と共に幻想的な時間は終わり、出演者たちはビニールをまとめ、台の下に戻して去る――。

このアトリウムパフォーマンスは、劇場公演の要素を使いながらも、別の

ニュアンスを含め、単なるプレゼンテーションではなく、30分の中で観客が自由に想像力を働かせることのできる構成。それでいて、この後に劇場公演を観ると、アトリウムで観たものにまた違う解釈・イメージが加わるような仕掛けになっていた。



開演前のアトリウムの様子(撮影：筆者)

2. 『TOGE』劇場公演初日後のnote(ダメ出し)

17日に初日を迎えた劇場公演。18日の2回公演の前には、初日を受けて、小野寺によるnote(ダメ出し)が行われた。

ここでは、主に「肉」「蠅」「夢のシーン」などと便宜的に名付けられたいくつかのシーンを確認。「倒れて横たわるレンシンを藤田、崎山、ジュイチュー、梶原が取り囲むと、いつの間にかレンシンが肉の塊になっているという「肉」の場面では、キュー出しを再確認。出演者とスタッフがキューによってリアルタイムで一緒に動いていくことの多い本作。出演者の誰がどう動いたタイミングでスタッフがキューを出すのか、それは他の出演者に見えるのか、あるいは別の出演者に合わせてキューを出すほうが合理的なのか、初日を受けて再検証・再決定がなされた。

「蠅」では、ジュイチューが蠅を追い払うのだが、その際の音の響きをめぐり、様々なパターンが試された。

「夢のシーン」は、いくつかの家具に出演者たちが隠れ、家具だけが動く中、レンシンが椅子に座ってテーブルからゆっくりと滑り落ちたり上ったりする場面。初日では最初から音楽が流れたが、無音でのスタートに変更。そうすることで、不可思議さがじわじわと増していく。ただし、音がなくなった分、新たなキュー出しが必要になり、その段取りも決められた。

小野寺のnoteが終わったあと、舞台監督の岩谷ちなつが、出演者が紙を貼っていき、それが吹き飛ばされるという場面について、「紙を貼る最終位置をここにしてほしい」と出演者たちに伝達。紙の位置が、吹き飛ばす量を左右するからだ。

このように、初日が開いてもなお、ぎりぎりまで調整・変更が続いた。



noteを伝える小野寺と、舞台上の出演者たち(撮影：筆者)



吹き飛ばす紙の位置を確認(撮影：筆者)

3. 『TOGE』劇場公演

12月18日、『TOGE』劇場公演2日目(2回目)。第2回報告書にも書いた通り、本作はジョージ・オーウェルの小説『動物農場』をもとにしつつ、独自の「置かれている場所に気づいていない人たち」を描く。

開幕すると、監視カメラやスピーカーが舞台上に見える中、女性5人がこちらを向いている。どこか挑戦的で、一人ひとり、ある種の強さを感じさせる存在感だ。しかし彼女たちは、それとは気づかず“監視下”にあり、かつ相互監視もしていて、何かあると「シッ!」と注意し合い、隊列をなして動く場面でははみ出す者を他の者が引き戻す。これは現代社会にも当てはまる光景だろう。そのうち、レンシンが倒れ、他の4人がそれを見つめると、それが肉の塊となる。驚く人、現れた蠅を振り払う人、嘆く人。しかし、ほどなく人々はこの悲劇を忘れ、何事もなかったように日常へと戻っていく。

赤いハイヒールを履いて書類を持ったジュイチューが現れ、不安定な歩みを見せる。どうかしゅんと歩こうとするのだが、足元のぐらつきは直らない。藤田と崎山は紙の取り合いをする。身体で運んだり、くしゃくしゃにしたり、広げたり。さらにアトリウム公演にも描かれたリングが登場し、これまた人々の取り合いになる。大きな一つのゴムを全員が伸ばしてその中に入る場面では、人々が共同体の中で妨害し合い、咳払いなどで牽制し合う姿が展開する。

こうした日々に変化が生まれるのは、梶原演じる英雄の、力強いアジテートとその死。一同の暮らしは、協力し合っの共同生活へと移っていく。ボックスの装置に生えた緑にレンシンがじょうろで水をやる平和な場面もある日、5人が全員で腰掛けていると、鳥がやってくる。そのさえずりから外の話聞いて楽しい気持ちになる5人。勇気を得た彼女たちは外の世界と戦い、勝利を収める。ここからは、勢いついたり打ちひしがれたりの繰り返し。ラップフィルムで椅子に身体をくりつけられたレンシンがラップフィルムからの脱出に成功する場面には、外と戦いながら共同生活を送る不安感と達成感が象徴されているかのようだった。

やがて、5人は綱と椅子で塔を作り始める。しかしその塔は堅牢からはほど遠く、彼女たちの共同生活そのものの不安定さを示してもいる。最後、塔は崩壊し、5人は外に出る。全員での踊りはどこか祈りのようにも見える。彼女たちは下を向くことなく、遠い空へと眼差しを向けるのだった――。

動物という当初の設定に加え、出演者たちが生来持つ雰囲気もあってか、5人は、諍いしつつも、常にピュアでひたむきに見える。見えない敵に翻弄されながらも懸命に抗い、立ち上がろうとするその姿ゆえに、ラストも、動物たちが敗北し、共同体が無残に崩壊する原作に比べ、再生や肯定の色が強いように感じられた。

4. 舞台監督・岩谷ちなつインタビュー ※18日昼の回終了後に取材

――デラシネラの公演には過去にも何作か関わっていますね。

岩谷 舞台監督助手などで関わっていますが、舞台監督としては『Knife』に続いて2作目です。前はコロナも深刻な状況で皆神経質になっていましたし、海外のメンバーに加えてろう者の雫境さんが出ているのですごい数の言語が入り乱れていました。でも、今回はレンシンさんもジュイチューさんも英語が喋れる方で、もちろんどこまでちゃんと伝わっているか判断が難しい部分もありますが、二人とも、小野寺さんの英語はもちろん、日本語でもかなり汲み取ってクリエイションを続けていましたし、全体的にのびのびとできている気がします。私自身、高校生の時に1年間アメリカに留学していたので、こういう国際的なプロダクションは楽しいですね。

――演劇の舞台監督もなさっていますが、小野寺さんの舞台作りの特徴は？

岩谷 演劇だったら台本があり、そこから美術家がビジュアルのヒントを拾っ

て形に起こしてくれますが、ダンス、特に小野寺さんの舞台は、原作があっても詳細な台本があるわけではなく、小野寺さんのイメージの中で物語のピースを作っていく。その美術を作るまでには時間が必要で、でも稽古はその間も進んでいく。そうすると、仮の小道具がそのまま本番のものになるなど、大変なところが美術家の方にはあるのではないかと思います。装置を演劇的に動かしながら緻密に踊りのピースが作られていくので、舞台監督としても、仮の小道具を出しつつも実際にある美術のものとの整合性をどうするか、何を土台にして、どこを残し、どこを変えられるかということを考える難しさがあります。

――公演中は主にどこでどういった仕事を？

岩谷 舞台の後ろや、上手あるいは下手にいます。暗転の時には出演者と一緒に道具を動かすなどの転換をしていますし、“塔”を立ち上げる時には綱元で私が上げたり下げたりの操作をしています。通常の踊りの公演だと、流れを場当たりで決めるのが舞台監督の仕事で、あとは皆をサポートし応援するしかないことが多いのですが、デラシネラの場合は常に一緒にやる、という感じですよ。

――昨日の初日、舞台監督として全体の流れとしては何点でしたか？

岩谷 初日に100点を出さなければなりません、皆それなりに疲労もたまってくるし、道具も使えば使うほど壊れていくので、その100点をどう守って、事故や怪我なくお客様に届けていくかが勝負。そのためにも、色々な事柄をルーティンにはめてイレギュラーな事態が起きないようにすることに、重きを置いています。小野寺さんは常にアイデアが豊富なので、それを時間内にどう入れていくか、そういうところのタイムマネジメントも大事な仕事ですね。

5. 所感

複雑なスタッフワーク、キャストワークによって実現した、デラシネラの2つの『TOGE』公演。

アトリウムパフォーマンスでは、「この距離で、衣裳の質感の違いまで見える」(ツイッター)、「30分なのに、点から線、面から空間に展開してあれよあれよとイメージが膨らむ気持ち良さ」(ツイッター)、「動きなどが面白く、観客の集中を妨げがちな、エントランス近くの空間にもかかわらず、見入ってしまう感覚があった」(筆者取材)などの感想が聞かれた。

動物たちが農場主に対して反乱を起こす『動物農場』にインスパイアされたつつ抽象化された世界だけに、特に劇場公演では、管理社会や戦争などを想起させるシークエンスから恐怖や悲劇を強く感じた観客もいれば、それよりもユーモアや力強さを感じた観客もいたようだ。「囲われた場所にいる5人は、コロナ禍の我々のようでもある」(ツイッター)との感想もあった。

多様な感想もまた、作品そのものの多様性を象徴するものと言えるのではないだろうか？



©鈴木穂藏